

東京YMCA

6/7

2019年

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体の全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。



ボランティア・オブ・ザ・イヤー
Volunteer of the Year

「libyチャリティーコンサート実行委員会」

2018年度の「ボランティア・オブ・ザ・イヤー」は、不登校など生きづらさを抱える青少年の居場所「東京YMCAオープンスペースliby」のため、20年にわたりチャリティーコンサートを開催してきた「libyチャリティーコンサート実行委員会」が受賞しました。この委員会は、20年連続で委員長を担っている越智京子さん（写真左）ほか「東京たんぼぼYサービスクラブ」とliby運営委員などで構成され、コンサートの盛会に向けて企画から運営まで精力的に活動しています。

2019年度会員部運営委員

◆再任（9名）
青木 方枝
笈川 光郎
小原 史奈子
小原 武夫
木村 光晴
蔵知 浩
篠田 秀樹
東矢 高明
綿引 康司

◆新任（9名）
麻生由美子
今井 武彦
大谷 博愛
大輪 匡史
唐島 悦子
小林 文彦
菰渕 光彦
鈴木 雅博
中内 秀子

◆退任（8名）
*任期満了
相川 達男
上田 晶平
工藤 大丈
高橋 伸
中村 周三
長谷川あや子
林 正人
宮谷 直幸

ユース ボランティア・オブ・ザ・イヤー Youth Volunteer of the Year

※カッコ内は
キャンプネーム

吉岡 新奈さん（パニー）／江東センター

野外グループ活動、シーズンキャンプの他、江東親睦会やバザーなど様々なイベントに率先して参加。誠実によくがんばる姿は、保護者からも大きな信頼を得ています。

太田 帆南さん（ぞろ）／山手センター

特別支援プログラムを中心に、キャンプや山手センターの諸活動に積極的に参加。丁寧なコミュニケーションと笑顔で、こどもたちや保護者、リーダーからも慕われています。

久保 大空さん（くっぼ）／西東京センター

大学4年間にわたり、キャンプや特別支援プログラムなどで活躍。人と関わる楽しさや難しさに真剣に向き合った経験を活かし、4月からは中学校の先生になりました。

中山 美登里さん（びよこ）／南センター

小学生の野外グループ活動やキャンプのほか、災害復興支援活動など幅広く参加。人のために率先して行動できる優しい人柄は、どの年代の子どもたちにも人気があります。

安田 圭吾さん（はやぶさ）／東雲センター

キャンプや野外グループ活動に意欲的に参加。持ち前の明るさと温かさで東雲センターを支えてくれました。またリーダーリクルートにも尽力してくれました。

会員の活性化目指して “新たな仕組み”を考える

「会員のあり方について」の議論に向けて

2018年度会員部運営委員長

上田 晶平

2019年度の会員部の計画が、先日の会員大会で報告されました。前年同様「会員運動の活性化と会員の維持増強」が掲げられていますが、例年と異なる点は「会員のあり方について考える場を作り、会員がより関わりやすい仕組みを考える」として、会員制度を含めた会員の今日的なあり方について議論していく、としていることです。この計画策定に関わった者の一人として、その趣旨を説明したいと思います。

YMCAと会員のあり方については、これまで「YMCAは、会員による運動体である」と説明されてきました。この考えは「会員こそが、東京YMCAの使命に沿った活動の運営主体である」との意味で、YMCAの会員のあり方の原点になっています。ただ、東京YMCAの財政危機による神田本館売却後の会員制度の変更や、その後の公益財団法人化などを契機に、徐々にこうした意識は会員側でも希薄になってきているのが現状です。昨年度の会員部運営委員会の議論の場でも、YMCAと会員のあり方については、前述の原点に近い考えから「会員とはサービスを受ける主体であり、YMCA（スタッフ）は会員にメリットのある活動を提供してほしい」というものまで幅広い意見が出てきました。現在の東京YMCAに

は、見識高く豊富な知識や経験を持つ多くの会員がおり、たくさんの活動が支えられています。会員制度なくして、現在の東京YMCAは考えられません。その一方で会員の高齢化も進んでおり、中心的に活動을担っている会員の数は減少しています。

将来の会員活動の活性化に繋げていくためにも、一人でも多くの会員の方に意見をお寄せいただき、会員のあり方やコミュニティセンターへの関わり方などについて、共に考える機会を持てることを期待しています。

2018年度 名誉会員

仲田 達男さん

徳久 俊彦さん

1950年に中央大学YMCA（白羊会）に入会。1982年に英語専門学校運営委員に就任。その後、常議員、常議員会議長、監事、3カ年計画推進委員長等を歴任。1993年から理事。



2003年から6年間は理事長として重責を果たされた。また20年以上にわたり毎月1回「中国語の聖書に親しむ会」を指導。中国語、ギリシャ語、日本語を比較しながら聖書の理解を深めている。東京八王子ワイズメンズクラブメンバーとしてもYMCAの活動を支援してきた。



1950年に東京大学YMCAの寄宿舎に入り、学生YMCAに参加。その経験から東京YMCA山手学舎の設立に貢献した。1975年から常議員、監事、国際協力事業委員などを歴任。1981年に学校法人東京YMCA学院理事となり、2009年以降はその理事長を務める。山手ランチ運営委員、百年史編集委員、医療福祉専門学校運営委員などと幅広く奉仕した他、20年以上にわたり午餐会世話人代表も務めた。全国YMCAや学生YMCAでも数々の役職を担っている。

赤△三角

「東京YMCA山手学舎」は、山手会館内にある60年以上の歴史を持つ男子学生寮です。1期生から現役に至るまで脈々と流れる繋がりは、創立の精神といった抽象的なものに止まらず、直に触れ合う現実の人間関係にまで及んでいます。他に例をみないこの長い繋がりが、山手学舎の自慢です▼50年前私も舎生でした。それは私の誇りでもあります。人生の多くの場面で学舎での経験が教訓となり、世代を超えた付き合いが人生を豊かにしてくれました▼昔と同じように、今も現役は定期的に懇談会で学舎の運営を真剣に議論し、聖書研究会で自らの生き方を模索し、災害復興ボランティアに参加したりもしています。そして社会人となっても学舎やYMCAの諸活動をサポートし続けます。このような流れを見ると、山手学舎はYMCAの重要なミッションの一つです▼今も現役生は実りある学舎生活を楽しんでいますが、共同生活に不慣れた若者は食わず嫌いの不安感から、学舎への入会希望が低下しております。YMCAのこのミッションが今後も続いて行くように、山手学舎へのサポートを幅広く呼び掛けて行きたいものです。（山手学舎運営委員／会員部運営委員 大谷博愛）

YMCA キャンプ100年

会員が語る「私のキャンプ・ストーリー」



↑つるじん（3面）のクラフト。竹で作った弓矢で遊ぶ

日本でYMCAが初めて教育的な意図をもったキャンプを実施したのは1920年（大正9年）のこと。以来子どもたちの「限りなき成長」を願い、多数のキャンプを行なっています。2020年に100年を迎えるにあたり、キャンプに関わりの深い5人の会員に、その思いや期待を聞きました。

■ボランティアリーダーから指導者に 願いのこめられたキャンプ



高橋 伸 さん
国際基督教大学（ICU）客員
准教授／元アジア・オセアニア・キャンプ連盟事務局長

私がYMCAの組織から半世紀も前の大学の

た高橋和敏先生から、アメリカのサマーキャンプの映像を見せていただき、そのスケールの大きさに驚きました。三隅達郎先生からも、戦前の北米キャンプの話や、

「大人が本気で子どもたちのために専用の施設やプログラムを作って行うキャンプ」であることに感動しました。

私は大学3年生から東京YMCA世田谷プラ

キープには、水上プログラムや野外活動などさまざまな活動があり、さらにキャンプファイアーだけでも儀式的な力や

「大人が本気で子どもたちのために専用の施設やプログラムを作って行うキャンプ」であることに感動しました。

私は大学3年生から東京YMCA世田谷プラ

キープには、水上プログラムや野外活動などさまざまな活動があり、さらにキャンプファイアーだけでも儀式的な力や



日本YMCA同盟 キャンプ100年特設サイト

日本YMCA同盟の特設サイトでは、全国100人の「キャンプにまつわるYMCAストーリー」を掲載しています。今号で紹介した5人の方の全文も掲載予定です。

<https://www.ymcajapan.org/campaign/camp100th/>

子どもたちと過ごしたキャンプが、その後の私の仕事や他のキャンプでも大いに役に立っています。

キャンプには、水上プログラムや野外活動などさまざまな活動があり、さらにキャンプファイアーだけでも儀式的な力や

「大人が本気で子どもたちのために専用の施設やプログラムを作って行うキャンプ」であることに感動しました。

私は大学3年生から東京YMCA世田谷プラ

キープには、水上プログラムや野外活動などさまざまな活動があり、さらにキャンプファイアーだけでも儀式的な力や

「大人が本気で子どもたちのために専用の施設やプログラムを作って行うキャンプ」であることに感動しました。

私は大学3年生から東京YMCA世田谷プラ



宮谷 直幸 さん

私立中学・高校教諭。
東京YMCAでは、野外・環境教育事業委員、ウエルネス事業委員、会員部運営委員などとして貢献。

初めてYMCAのキャンプに参加したのは小学3年生のときのこと。そこから私のYMCA人生が始まりました。高校卒業までさまざまなキャンプや活動に参加し、学生時代はリーダーとなり、

YMCAの活動最優先で走り回りました。「野尻キャンプ」の駐在リーダーをした関係から、社会人になってもずっと野尻キャンプに関わり、自分の子どもがそのキャンプに行くようになったので

一線を退いた現在です。YMCAのキャンプは、私にとって人生そのものだとと言っても過言ではありません。私は教員をしていますが、リーダー経験が現在の仕事、そして生き方の原点となっ

■参加者からリーダー、そして委員へ キャンプは人生そのもの

ています。どのように子どもたちを楽しませながらも伝えたいことを的確に伝えるかなど、リーダー時代に考えていたことと今の教員としての姿勢は何も変わりません。その経験がなければきっと今の自分の教師像はなかっただろうと思います。人生で初めて親友と呼べる友に出会ったのもキャンプでした。仲がいいのとは違う、思いをぶつけ合いながらも認めあえる。こんなに人と信頼し合えるものなのかと自分でも不思議な気持ちでした。心から尊敬できる方に出会ったのも、そして人生のパートナーに出会ったのもキャンプでした。

た。キャンプと一緒に創り上げていく仲間だった彼女と、今は家庭を一緒に創り上げています。そして3人の子どもたちもそれぞれYMCAのキャンプに参加しています。昨今、様々な団体がYMCAの良い点は、ボランティアのリーダーが指導者であることだと思います。バイトではない彼らが強い想いをもってがむしゃらに駆け抜けていく姿こそが、子どもたちにとって活きたお手本になると信じています。子どもたちとリーダーを育てる、そんなYMCAであり続けることを願っています。



齊藤 實 さん
東京YMCA元副総主事／
YMCA史学会理事長

戦争が終わると、農地改革のあおりで東京YMCAは危うくキャンプ地の不在地主となりかけた。その時、主事・原直治郎が一家を挙げて、冬の備えもなく周囲に何の施設もない無人の山中湖畔に移り住んだ。だから、キャンプ地は取りあげられず、YMCAキャンプ地として再出発できたのであった。

山中湖畔では、静かな湖畔の森の蔭から、小鳥の声が聞こえた。小雨がキャビンを濡らすと、期

せずにキャンパーが歌う。"やまべに降る雨は、音もなくそそぎ、小鳥の巣を濡らし、ほのかに花はひらく。アロハオエ、アロハオエ..."

■キャンプを機にYMCA主事に キャンプは「聖地」！

70年ほど前の話である。でも昔話ではない。70余年もの日々をYMCAにつなぐ大事な出発点となった私の「会員生活の原点」の話である。

私は1946年9月26日、もつと多彩な友人関係

夏であった。戦争が終わると、農地改革のあおりで東京YMCAは危うくキャンプ地の不在地主となりかけた。その時、主事・原直治郎が一家を挙げて、冬の備えもなく周囲に何の施設もない無人の山中湖畔に移り住んだ。だから、キャンプ地は取りあげられず、YMCAキャンプ地として再出発できたのであった。

山中湖畔では、静かな湖畔の森の蔭から、小鳥の声が聞こえた。小雨がキャビンを濡らすと、期

せずにキャンパーが歌う。"やまべに降る雨は、音もなくそそぎ、小鳥の巣を濡らし、ほのかに花はひらく。アロハオエ、アロハオエ..."

「遊びの中の学びを見つめる」～保育職員研修～

松浦浩樹教授（和泉短期大学）から学ぶ

東京Y M C Aの保育事業に携わる職員140人が5月18日（土）、社会体育・保育専門学校に集まり、全体研修を受けました。

春・秋と毎年行われる研修ですが、今回は講師に和泉短期大学教授の松浦浩樹先生をお迎えして、『遊びの中の学びを見つめる保育者の眼差し』という主題で、遊びを大切にする保育がこれからの教育の基盤というお話をいただきました。

保育の中での『遊びの時間』を単に自由時間としてではなく積極的な『教育の時間』として捉えること。そのためには、子どもが“自由感”をもって

主体的に生きられる保育の環境であることがいかに大切かを学びました。子どもたち一人ひとりの“今の心”そして“今、学んでいる姿”を読み取り、次のステップへ導くために必要なことを考え、子どもたちの遊びの中にある学びの芽(=目)を確かなものにしていくことが、これからの保育者に求められる姿勢なのだと教えられました。

保育者一人ひとりが自分の保育を振り返る大切な時間となりました。研修での学びを保育に生かし、これからもより良い保育を実践していきたいとします。

(オリーブ保育園 園長 矢野久美)

日本一になって
気づいたこと

子育てコラム



私は学生時代にアメリカンフットボールを始め、豪のクラブチームにスカウトされ、社会人になってからも競技を続けてきました。日本にはプロチームがないため、働きながらトレーニングを積む日々を過ごす中、私が芝浦アイランド児童高齢者交流プラザに勤めて一年目の年に、念願だった日本一の目標を達成することができました。決勝戦の舞台だった東京ドーム

には、家族や友人だけでなく、同僚などたくさんの方々が応援に来てくださり、皆様の前で日本一に輝くことができたことは私の人生の貴重な財産となっております。

芝浦アイランド児童高齢者交流プラザ
主任 杉原 雅俊

もともと自分自身のために始めた競技でしたが、試合で活躍する度に周囲の人々が応援してくれることにやりがいを感じ、アメリカンフットボールで学んだ精神を子どもたちに熱く伝えながら、健やかに成長できるようサポートしていきたいと思っています。

き、自分自身がこれまで築いてきた努力の影には、多くの人々の力があつたことに改めて気づきました。そして、人への思いやりや配慮こそが大切だということ

総主事カフェ

東京Y M C A総主事

菅谷 淳

総主事カフェにようこそ。小学生の頃、学期が終わるごとに通信簿をもらいました。長期休暇が始まるのは嬉しいけれど、その前に通信簿を父に見せるのが憂鬱でした。妻はオール5だったみたいで、おまけに健康優良児。親に迷惑をかけないように全額奨学金で看護学校に行き、看護師として親孝行をしようとしていたのを私が結婚で東京に連れてきてしまったのです。それはともかく話を戻すと、この通信簿、私は大体3か4。たまに2があつて父からこっぴどく怒られるという感じでした。当時の通信簿は左側が科目の成績で、右側には小学校での生活の様子が書かれていました。そこには

「整理整頓ができる」「人に優しい」「根気強い」「リーダーシップが取れる」「協調性がある」などの項目に○や△が付いていました。他に出席日数や担任の先生からのコメントが書いてあり、学級委員だったとか、生徒会を頑張ったとか。しかしながら勉強以外に一生懸命頑張っても、左側しか見ない父を見て、次第に「勉強さえできればあとはどうでもいい」という考えに自分が変わっていったように思います。

その後受験戦争が始まり、思いやりとか優しいなんて後回し。人を蹴落としてでも偏差値が高い学校へどうやったら入学できるかばかり考えていたように思います。猛勉強の末第一志望の大学に合格できたけれど、

「整理整頓ができる」「人に優しい」「根気強い」「リーダーシップが取れる」「協調性がある」などの項目に○や△が付いていました。他に出席日数や担任の先生からのコメントが書いてあり、学級委員だったとか、生徒会を頑張ったとか。しかしながら勉強以外に一生懸命頑張っても、左側しか見ない父を見て、次第に「勉強さえできればあとはどうでもいい」という考えに自分が変わっていったように思います。

「通信簿の右側も大切だよ、いやむしろ、この先A I（人工知能）が進んだら、通信簿の右側こそ大切だよ」と、受験に悩む子どもたちと、受験に熱心な大人の皆さんへ伝え続けていきたいと思っています。

2020年

障がいのある子の保護者として

一人のリーダーとの出会いから



五味 宣子 さん

知的障がいのある2人のお子さんが30年にわたり東京Y M C Aのキャンプやフィットネスに参加。写真左から逸太郎くん、江里子さん、宣子さん。

Y M C Aとの出会いははるか30年昔のことです。夫の急逝後子どもたちの知的障害が発覚し、サラリーマンを続けてい

た私は2人の障害児の放課後を確保するため、当時福祉を勉強していた学生さんゆうこさんの応援を仰ぎました。当時、家にはお婆さんが3人もいました。障害児の世話

ができる状態ではありませんでした。その頃の私はとにかくその日を無事に終えることだけで精一杯でありました。ゆうこさんと毎日お付き合ひし、冬を迎える頃「江里ちゃんをスキーキャンプに連れて行きたいんですけど、いいですか？」と言われ、驚きもし、戸惑い「嬉しいけど、無理でしょ？」とお返事した覚えがありま

す。後で知ったことですが、ゆうこさんは事前にディレクターさんに我が家の状況、江里の状態を説明し、何度も話し合いを繰り返して、自分がリーダーとして参加するキャンプに江里を受け入れようとしたと聞きました。当時、Y M C Aが障害児を一般の幼児キャンプに受け入れていた話など聞いたこともありませんでした。一度ディレクターさんとお話ししたことがあります。「親だつて大変な子なのに本当に申し訳ありません」と言う

のたつた3日じゃないですか」と言っていたが、思わず泣きそうでした。お言葉に甘えて姉弟の夏冬のキャンプ参加は続きました。本人たちは次第にキャンプの楽しさを知り、健常者のお友達もできました。障害者学級の様な特別な配慮もない同世代のメンバーや年上のリーダーとの関わりは姉弟にとつてはかなり刺激的でしたが、おかげで「コンタクトの取りにくい障害児」から少し脱皮できたような気がしたことが母には何より嬉しいことでした。

クラフト指導40年

合言葉は「小さな手は魔法の手」



永井 勝彦 さん

キャンプのほか東京Y M C Aの造形教室、社会体育・保育専門学校等で講師を務める。キャンプネームは「つるじん」。

1976年、「赤城・親と子の工芸村」というキャンプに指導者として参加したのが、私のY M C Aキャンプとの出会い

です。以来40年余、さまざまなキャンプで子どもたちと共に作品を作り続けています。やぐらを組んで秘密基地を作った

り、20人乗りのいかだを作って無人島に出かけた。レパトリーは500を越えました。クラフトには魔法があります。グループで一つの物を制作すると、工作が苦手な子どもたちも驚くほどの集中力を発揮しますし、皆で作りに上げたときの達成感は格別です。東日本大震災のリフレッシュキャンプでは、被災地のご家族と一緒に

変わる木工細工で、子どもたちはキャンプ中お守りのように持ち歩いて鳴らし、「まだヒヨコ位かな？」などと育てて、大事に持って帰ります。私は普段はアトリエを主宰し、図工の教科書も書いたのですが、キャンプのクラフトには都会のアトリエや学校にはない、キャンプというケタ違いな時間の中でしか生まれないアイデアがある。たくさん笑顔に出会えて、子どもたちも私自身も成長していける。こんなに素晴らしいことはないですね。